

武蔵工業大学 新キャンパス 計画案

—私たちの学校は私たちの手で—

世の中には残念なことが数限りなくある。一本誌6月号で紹介した、「鎌倉市立御成小学校」の改築の是非をめぐる論議の時もそうであった。古く市民との「対話による学校づくり」を宣言して登場した新しい市長は、就任後まもなく対話の窓口を閉ざしてしまった。肝心な作業は斯く少数の学者・専門家による象牙の塔の、いわゆる系列的人脈組織のメンバーによって、サッサと終了してしまった。独創専門型で素早くゴールインを果したのである。

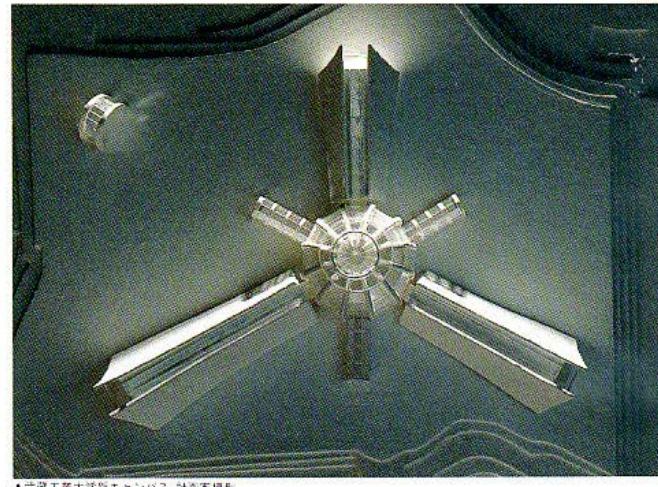
「おー、話がちがうぞ！」と叫んでももうダメだ。役人からは丁重な「微笑」が返ってくるだけであった。

ところで話は變るが、私の出身大学である武蔵工業大学が、この度特色ある新学部を設置したのである。環境情報学部という近未来指向の新しい学問分野を學習しようと、この春から学生の募集を開始した。

「来る21世紀の社会は、我々を取り巻く自然環境との調和と共生を最優先した上で、望ましい社会、文化環境を創造することによって云々……」と、その設立主旨を朗々と説いていた。ここまでは誠に結構な話である。当大学環境情報学部の設立基本構想は更に続く。

「学生が自ら考え、自らの問題を提起し、問題を解決する能力を養うため自ら行動し……」と、ボルテージは上がる一方である。

しかし残念無念のはここから先だ。自らの思考能力も行動力もあるはずの当大学建築学科と伝統ある如学会に対して、何故か新学部の

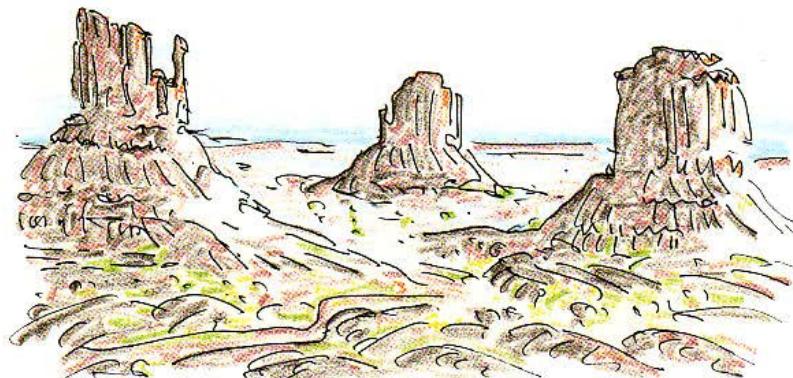


▲武蔵工業大学新キャンパス 計画案模型

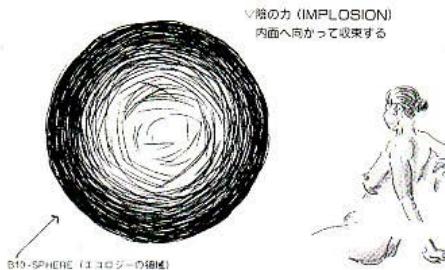
キャンパス設計の相談らしきものが一切ないのである。大学の経営母体の系列企業である某大手ゼネコンの設計・施工に、すべてが委ねられてしまったのである。

「そんなバカな……！」とばかり、本学出身の菅原直彦名誉教授を中心に、如学会員の有志数十名が、「我々の学校は我々自身で考えよう！」を合言葉に、毎晩夜遅くまで議論を重ね、先生自身の力作をはじめ、各人思い思いの計画案を続々と誕生させた。後日、これ等すべてをまとめて持参し、大学側に直訴する。しかし、何故か返ってくる答は、ここでも意味不明の「スマイル」であった。

生命の原始的な形態については、何度もこの誌面で触れている。植物の萌芽、タマゴ、幼虫……etc.、そこには未だがたくさん詰まっている。時間・空間が凝縮され、このミクロな物体に高次元のエネルギーが最も合理的にインテグレートされている。一方、同じ生命でも太陽系宇宙には巨大な生命体がボッカリと浮かんでいる。BIO-SPHERE



△MONUMENT VALLEY (アメリカ・ユタ州) にて
EARTH MONUMENTS OFFER IMAGINATION AND CHANGE AS THE FORCES OF CLIMATE AND CELESTIAL CYCLES PLAY UPON THE MATERIAL AND FORM OF THEIR SURFACES — CIVILIZING TERRAINS (WILLIAM R. MORRISH著) より



と呼ばれるマクロな空間。いや巨大な生命が存在している。

「仰ぎ見ると、空は果てしなく広がっている。空気の広がりはどこまでも続いているかのように……、ところが宇宙船に乗り込んで地球を発てば、10分もたたないうちに大気の層を突き抜けてしまう。その向うには何もないのだ!……、虚無と寒氣と暗闇だけである……。一見『果てしない』と見える青空。私達に空気をりえ、無限の暗黒と死から守ってくれる大気は、実は限りなく薄いフィルムに過ぎない。生命を守ってくれる薄い被膜に過ぎない……。」

—『造宇宙飛行士の手記(部分)』より—

上空50キロ圏で地球を優しく内包し、漆黒の間に端々に輝きを放っているもの。これがBIO-SPHEREの正体だ。「ONE-LOVE」と呼ばれるこの巨大な生物全体は、実は我々人間も含めて、それこそ無数の個々の独立した微生物の集合体だ。無数の小さな命が結合して、ひとつの大生命を形成し、「一体化」(ONE-LOVE)している。

「大抵の人々は、『一体化』という理想を一応掲げているが、実際は区別や分け隔てをしている。個々の信条、国籍、宗教、そして政治上の差異を捨てられない。そういうものがニセモノであることに気が付かないでいる。人間同士を引き離すものはニセモノに外ならない」

——解剖の心理、ヒラヤ大作の教えより——

地球上にある残念であろうと、無念であろうと、何んであろうとかんで



あろうと、あらゆるものをそっくり-SPHEREは平原な空間をキャンパと置いてみたい。そしてしまったのである。

中心に設えられた人工生命体、その内部は多様な人間同士、あるいは異なる分野の学問、学問同士が存在している。限りなく個別化、もしくは個性化しようとするベクトルと、反面限りなく一体化しようとする、二つの異なるベクトルで充満している。四方八方へ向かって多様化していくEXPLOSION、内側に向かって統合・一体化をうながすIMPLOSIONを繰り返しながら、個別化と全体化(一体化)が同時に進行し、時間の経過とともに放射状モデルが完成していくという仕組みだ。

個と全体、自律した個人の確立と、個人が集合化・社会化された全体があるように、細分化された各学問の質の高い自律と関連する分野を学際的に捉えた融合・学問領域の共生を可能ならしめる空間モデルか、私のその時思いついた計画案であった。

「そんなバカな！」とばかり、心の底から発せられた菅原先生の一言が、武蔵工大如学会有志達の気持ちを一気に高揚させたのであった。皆の気持ちがこの時ひとつになった。私の気分もこの時、途方もない「たかみ」に舞い上がってしまったものだと、今更ながら……呆気にとられている始末である。

